

—Accel World— 《Violet・Joker Record》

ジェイ・デスサイズ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

2年前、黒の王【ブラック・ロータス】によって加速世界を退場した赤の王【レッド・ライダー】、そしてそのライダーに恋心を抱いていた紫の王【パープル・ソーン】はそのショックにより加速世界から退場する。

その後、加速世界に2代目紫の王として君臨したのはソーンの“子”であった。

“彼”は同じ境遇にある少女と出会い、この広大な世界を駆け巡る。これはそんな物語……。

——死ぬぜえ……オレの姿を見た奴は皆んな死んじゃうぞっ！

目次

【序章】	— P r o l o g u e —	1
【人物紹介】	— P r o f i l e —	5
# 1 【休日】	— H o l i d a y —	10
# 2 【秘密】	— S e c r e t —	18
# 3 【軍】	— L e g i o n —	24

【序章】 — Prologue —

「・・・貴方の勝ちよ、ジョーカー」

月光ステージの壁に寄りかかる紫の王【パープル・ソーン】はボロボロの状態で、目の前にいる・・・同じくボロボロでほぼ同じ紫の装甲を持つデュエルバター【ヴァイオレット・ジョーカー】に声をかける。

「マス、ター・・・っ！」

「もう、私の子でしょ？そんな情けない声を出さないの」

愛武器である錫杖【ザ・テンペスト】でジョーカーの頭をつつきながら、微笑む。

「・・・考え、直しませんか？」

「・・・ないわ。それになんか・・・疲れたみたい」

ふう、と溜息をし、ジョーカーを見つめる。

「貴方に全部押し付けるみたいでごめんね、ジョーカー・・・いや、零」
「っ！」

「私のレギオン・・・任せてもいいかしら？」

「はい・・・っ！先輩・・・っ！」

「ふふ・・・なら、安心ね。ありがとう、零」

ソーンが言い終わり、アイレンズの光が消え、眼を閉じたと判断したジョーカーは己の鎌で【親】^{バーストポイント}を斬った。

ソーンの所持する膨大なB Pがジョーカーへ移る。本来はこれで終わるのだが、ステレージにはソーンの愛武器【ザ・テンペスト】が入っていた。

「・・・っ！まったく・・・本当に全部任せる気ですか」

ジョーカーはデスクトップと操作していき・・・レベルアップの画面まで進めていき・・・【YES】【NO】、2つのコマンドから【YES】をタップした・・・。

これは2代目紫の王になった少年と・・・2代目赤の王になった少女・・・同じ境遇の2人のRecord・・・。
リアル現実で会った2人・・・互いに痛み、不安を分かち合う・・・そして、新たな絆、想いを紡ぎ・・・華が咲き誇る。
黒の王の復活・・・加速世界初の飛行アビリティの登場・・・これは、別の加速世界のお話・・・。

——オーロラ・オーバル領内——

「お、おい！レギマスの名前・・・っ！」

「ああ・・・ソーン様じゃなくなってる」

「恐らく・・・それらの点も踏まえて説明してくれるだろうよ」

ジョーカーがレギオンメンバー全員に放った緊急集会のメッセー
ジに応じて、メンバーが全員、集まった。

ジョーカーはそれを確認すると、皆の前に姿を現した。

「ジョーカー！」

「おい、これはどうなっただよ！」

「・・・【初代】紫の王、パープル・ソーンはこの世界から絶たれた。マ
スターの命により、オレが戦い・・・オレが勝った」

ジョーカーの言葉を聞いた途端、メンバーは驚き・悲しみ・怒り、
様々な感情を抱いた。

「これより、2代目紫の王は・・・このオレ、ヴァイオレット・ジョー
カーが務めさせてもらう！皆、色々思うことはあるだろうが・・・こ
れがマスターの意志。信じられない者に関してはマスターより、リプ
レイファイルを預かっている。それを見ろといい・・・」

そう言いながら、左手にトランプサイズの黒いカードを取り出し、
部屋の真ん中に弾いた。

「今日から1ヶ月、脱退する者は申請するといひ。マスターの命とは
言え、【親殺し】には変わりない・・・。こんなレギマスには付いてい
きたくない者もいるだろう・・・、申請する者はすぐに許可する。今
のオレに止められる筋合いはないからな」

そう言いながら、ジョーカーはその場を後にした・・・。

「・・・」

現実に戻ったジョーカーは、何となく机に置いてあるタロットを引いた。

【運命ホイール・オブ・フォーチュンの輪】の正位置・・・【定められた運命】、か・・・」

——何人、脱退しちまうかな・・・まあ、いきなりあんなの言われても整理つかないよな——

ジョーカーこと零は、引いたタロットを眺める。これから自分に何が起ころうしているのか、タロットを引いて占おうとしたが、捲ろうとした手と止め、そのまま眠りについた。

——そのカードが【死神デス】であることを知らずに——

【人物紹介】 — Profile —

【氏名】

・月影 零

【学年】

・江東区紫月中学校2年A組 14歳 8/6

【プロフィール】

・深い紫色の髪をしたショートカット。左前髪にニコから貰ったX印の赤い髪留めをしている。

月影財閥の息子で、小学生の頃に「金」目当てで近づいてくる同級生が多く、よく1人になっていた。本当に信頼出来る友人は両手で数える程度（小学校時）。口が上手く、金目当ての同級生などを騙したり惑わしたりしていた。中学校ではそういった人が居なかった為、クラスに馴染んでいない。

冷静な性格だが、勝負事になると熱くなる一面がある。母親が占い師であり、その影響で占いを始める。常にタロットカードを持ち歩いて行動している。何かする前、した後にタロットを引く癖がある。

【デュエルアバター】

【ヴァイオレット・ジョーカー】 Level 9 異名【死神】デスサイズ

・紫のレギオン【オーロラ・オーバル】のレギオンマスター、2代目紫の王。王になりたての時は反感を受けてはいたが、現在では信頼が厚い。見た目はガンダムデスサイズヘル（EW版）にととても似ており、本人もとても気に入っている。

・固有アビリティ【空中歩行】エアリアル・ウォーク

足の裏に空気を固める機能があり、空中の空気を固めて立つ・歩く・走る・ジャンプを行なう可能。

・固有アビリティ【ハイパージャマー】

一定時間、自身の装甲を透明化させることができる。発動中はマップにも把握されないが、その間装甲が弱体化する。

・強化外装【ジョーカーソウル】

初期装備のビーム刃の鎌で、ジョーカーの愛武器。

・強化外装【アクティブ・クローク】

Level 5に上がった際のLevel upボーナスで手に入れた強化外装。見た目はコウモリのような黒い翼の様なユニット、空を飛ぶようではなく防御より。レインのレーザー砲、一撃は耐えることができる。翼を閉じている状態で攻撃を受け、翼の限界を超えると自動的に翼が開く。

・必殺技

【デスサイズハリケーン】

初めての必殺技。自分を身体ごと横回転させ上へ螺旋を描きながら上昇していき、鎌を振り下ろし死の竜巻を相手にぶつける。

【デスサイズヘル】

武器である鎌を相手に投げつけ、鎌が捕らえるとジヤマーを展開し急接近し、鎌を取りながら相手の背中に回り込み鎌を振り下ろす。(想像しにくい方はVSシリーズのガンダムデスサイズヘルの覚醒技と違ってただければ)

【Endless Waltz】

即座に接近し鎌で踊るかのように切り刻む、その姿・・・死神の如く。

【氏名】

・上月 由仁子

【学年】

・小学5年生

【プロフィール】

・愛称として「ニコ」と呼ばれることを好む。遺棄された子供や親と死別した子供を国家後見制度の適用により保護養育する全寮制学校で育った孤児。気性の激しい性格だが面倒見のいいところもあり、零が冷静さを無くしかけた時のストッパー役。零とは趣味が合いよくゲームで対戦をしている。勝率は五分五分。

【デュエルアバター】

【スカーレット・レイン】 Level 9 異名【不動要塞】

イモービル・フォートレス

ブラッディ・ストーム
【鮮血の暴風雨】

・赤のレギオン【プロミネンス】のレギオンマスター、2代目赤の王。王に上り詰める過程の大規模戦闘で、出現地点から一步も動かずに30人近い敵を屠ったと言われている。デュエルアバターは本体こそ現実の肉体に似た小柄なもの。強力な火器で敵を圧倒する遠距離砲撃に特化した戦闘スタイルが基本戦法。

・固有アビリティ【レジョン・エクステンション視覚拡張】

風向や熱源をスキャンやその応用でバーストリンカーが蓄積している戦闘経験ならびに戦闘力を「情報圧」として視覚化し、観測することが可能。

・強化外装【ピースメーカー】

レインの初期装備の銃。チャージ時間によって威力が上がる性質を持った拳銃型の強化外装。

・強化外装【インビンシブル】

レベルアップボーナス全てを注ぎ込み、主砲、ミサイルポッド、機銃つきコクピット、背面スラスタ、脚部の5つのパーツで構成された強化外装。

・必殺技

【ヒートブラスト・サチュレーション】

【ヘイルストーム・ドミネーション】

【コロナル・マス・イジエクシジョン】

【氏名】

・綾咲 久遠

【学年】

・江東区紫月中学校1年A組 13歳 6/23

【プロフィール】

・腰まで伸びた美しい黒髪に炎の様に煌めく瞳を持つ零の幼馴染の少女。辛さ・苦しさを真つ正面から受け止め、傷つきながらも真つすぐ歩いて行く性格。零とニコの関係も知っており、よくゲームで対戦をしている。属性はツンデレに含まれる。

剣丞の恋人であり、子である。

【デュエルアバター】

【ワインレッド・エンプレス】 Level 17 【魔女帝】
エンプレス・ウィッチ

・【オーロラ・オーバル】の幹部の1人。初代紫の王に戦闘スタイルが似ており、近接ではなく中、遠距離での戦闘を好む騎士型の女性アバター。零から初代の錫杖ザ・テンペストを託され、久遠が所持している。基本的には自分の武器を使用しているが窮地に陥った際には使う。必殺技ゲージ無しで火炎・水・電気・氷・自然・念力の魔法を繰り出すことができ、必殺技ゲージを消費することにより威力が変わる。（見た目はダンボール戦機のエンプレス）

・固有アビリティ【女帝の叡智】
エンプレス・ウイストウム

直径10mの範囲で、アバター・エネルギーを発する武器、地形からエネルギーを吸収し自分のゲージに蓄積する。吸われた対象はその範囲にいる間、一時的に性能が低下する（1割程度）

・強化外装【エンプレスロッド】

エンプレスの初期装備の杖。唱えられるほど、次に唱える魔法の発動速度上がる。

・必殺技

【暗雲雷撃】
サンダー・クラウド

空に暗雲を出現させ、対象へ向けて雷撃を落とす。

【叡智溢るる加速する世界】
アクセルオブウイストウム

自身と味方に攻撃力上昇・回避能力上昇・防御力上昇・被ダメージカット付与、を与える。（必殺技ゲージMAX時のみ使用可能）

【女帝の世界】
エンプレスオブワールド

エンプレスが使用可能な魔法全てを最大出力で対象へ放つ。

【氏名】

・蒼海 剣丞

【学年】

・江東区紫月中学校1年A組 13歳 8/21

【プロフィール】

黒に深い青が混じっているような髪、久遠とは逆で深い海のような蒼い瞳をしている。冷静沈着で思慮深いタイプで零・ニコ・久遠、三

人のストッパーのような役割をしている。ゲームでも策略で相手を嵌めるのが得意。

久遠の恋人であり、親である。

【デュエルアバター】

【マリリン・エンペラー】 Level 8 【皇帝】エンペラー

・【オーロラ・オーバル】の幹部の1人。ハンマーによる近接戦を得意とする騎士型男性アバターだが、チーム戦では指揮を得意とする。（見た目はダンボール戦機のジ・エンペラー）

・強化外装【ティターニア】

エンペラーの初期装備の鍵槌。レベルが上がるにつれて、威力が上がる。

・固有アビリティ【オルタナティブモード】

HPが三割になると発動可能のモード。自身の装甲が蒼く光り輝きアバター性能を大幅に上昇させる。必殺技ゲージがある場合、消費することで発動時間を延ばすことができる。

・必殺技

インバクトカイザー
【皇帝の裁き】

エネルギーを鍵槌に込め、対象へ向けて渾身の力で地面を叩き付け、地面から噴き出た地獄の業火で対象を焼き尽くす。

【Ωエクスペロージョン】

空高く跳躍し、縦回転しながら降下し対象の足元へハンマーを振り下ろす。叩き付けた場所を中心にX字で地面が割れ、蒼い業火が噴き出し対象を包み込む。

#1【休日】 — Holiday —

「……あの時の夢か」

2046年8月30日。目を覚ますと太陽がすでに上がっており、デジタルクロックには「06:30」と表示されていた。夏休みも今日を含め2日のみなのに対して、オレは学校に行く日の様な時間が覚めてしまった。

あの時の夢が原因というのはすぐに分かった。

「……【皇帝^{エンペラー}】の逆位置、【未熟】か」

オレの癖、何かの前後にタロットを引いてしまうことがある。今回の占いは完璧に当たっていた。

「起きるか……準備するには丁度いいしな」

ベッドから降りて洗面台へ向かう。するとキッチンの方から女性の声が聞こえた。

「あら、零。休みなのに早いわね？」

月影結菜。様々な占いをしていて命中率がかなり高いことで有名な占い師で、オレの母親である。オレがタロットに興味を持ったのも母親の影響だ。しっかり者で、何処となく姉さん女房的な印象をオレは持つっており、父さんも母さんには勝てない。

「ちよつと夢見が悪くて起きちやつたんだ」

軽く頬を掻きながら言うと、後ろから肩をポンと叩かれチャットが飛んできた。

『珍しいな、宿題でも忘れて結菜に怒られる夢でも見たのか？』

月影三日月。月影財閥のリーダー。ニューロリンカーの新型の開発、新たなフルダイブなどを開発している。父さんは障害の影響で発声することが出来ない為チャットで会話している。タップスピードは普通に会話出来る程……慣れてしまったが、普通に考えるとめっちゃ早いよな。

「違う違う、そんなわけないじゃん」

「つて、ミカ。何でそこに私がでるのかしら〜？」

『おっと。藪蛇だったか』

そう言いながら母さんからコーヒーを受け取り席に着き、テレビのニュースを見ながらコーヒーを飲み始めた。オレは顔を洗い、髪を整え、いつもの席に着く。オレもテレビを見ていると母さんが朝食を持ってきてくれた。トーストにベーコンを挟んだものとコーヒー。

「零、今日はニコちゃん泊まりに来るのよね?」

「うん。軽く買い物してから家に行く予定」

そう、オレの両親はニコのことを知っている。母さん曰く「零が決めた娘なら何も言わないわ」、だそうだ。

『まあ、初めは流石に驚いたけどな』

「うっ・・・い、いいから会社行きなよ!そろそろ時間だろっ!」

『ハハハ、そうだな。じゃあ、行くとしますか』

「ええ。いつてらっしやい、ミカ」

コーヒーを飲み干し、バッグを持つと父さんは仕事に出かけた。

「さて、私も準備しないとね」

「あれ、今日なんかあったっけ?」

「ええ、朝から収録が入ってるのよ」

そういうと母さんは苦笑いしながら出かける準備を進める。

「帰りは遅くなると思うから、ニコちゃんよろしくね?」

「ん、了解」

それから30分程して母さんも出かけ、家にはオレ一人になった。

「・・・(ズズズ)」

時間のできたオレはゲームの情報をチェックしたり、ニュースなどを見ながら時間を潰し、出かける準備をし待ち合わせの場所へ向かった。

「・・・暑い」

待ち合わせ場所にて想い人を待っているのだが、外の気温が予想より暑く電子版を見ると30℃を超えていた。ファンタグレープを飲みながら待っていると聞き覚えのあるエンジン音が近づき、そしてオレの近くで華麗にバイクが止まった。

「サンキュー、パド」

「NP」

バイクから降りた女の子がヘルメットを外しながらドライバ―に礼を言う。降りた女の子の特徴なのが炎の様に赤い髪のツインテール。そう、この女の子がオレの想い人、上月由仁子・・・通称「ニコ」だ。

「よう。ニコ、パド」

「よつす、零ノ悪い、待たせちまったか？」

「そんな待ってないから大丈夫」

「Hi、J」

相変わらず現実でもネット用語の様に話す女性は掛居美早・・・通称「パド」練馬区桜台の洋菓子店《パティスリー・ラ・プラージュ》の見習いパティシエール兼ウエイトレスにしてオーナー経営者だ。かなりせっかちな性格で店の制服である茶色のメイド服を着たまま街中も平然と出かける。オレのことをJと呼ぶのはアバターの頭文字から取っているらしい。

「レイン、Jのご両親に迷惑を掛けないように」

「わ、わーってるよー！」

「K。じゃあ明日迎えに来る」

そう簡潔に伝えるとヘルメットを被り行ってしまった。

「さて、じゃあ行くとしますか」

「おう！」

オレが手を差し伸べると、握ってくれた。そのままオレの家に向かって歩き始めた。

「最近どうよ、レギオンの方は」

「結構安定してきてるよ、あんなことの後だから最初は不安だらけだったけどあんまり脱退した奴も少なかったし、メンバーも色々手伝ってくれたからな。CCCにいつまでも隙を作る訳にもいかないしな」

「確かに・・・あの野郎が絡むと面倒なことになるのは100%確定してっからな」

ニコがとてつもなくムカつく相手を見つけた様な顔をしながらそう告げる。

「中身は置いといて、フォルムは結構好きなんだけどな。オレは」

「ああく確かに零ってああいうの好きだよな。あれは互いに嫌いだけど」

「表向きは友好的に接してるけどな、ニコの言う通り面倒なことになりそうだから」

「よく話合わせられるぜ。そうだ、それと——」

世間話をしながら歩いてみると、あつという間に家へ着いた。

「・・・来るたび思うんだけどよ。これは一般的な一軒家じゃねえよな」

「ああ、それはオレも同意する」

オレの両親は二人揃って普通というが、一般的な家より大きい。

「まあ、中に入って入って」

家の大きさについては置いといて、家の中に入る。

「ニコは先にオレの部屋に行ってくれ、飲み物とか持ってくる」

「ん、分かった。あたしの好きなの頼むぜ」

そう言い残すと慣れた足取りで階段を上がっていくニコ。

「ニコも慣れたもんだな。初めて来たときは借りてきた猫みたいだったのに」

前のことを思い出し笑いしながら飲み物やお菓子を用意し部屋に戻る・・・するとそこにはゲームをセッティングしているニコの姿が

あつた。

「・・・本当、慣れたもんだねえ」

「何の話してんだよ、零。んなことより早くバトロウぜ！」

ニコは目をキラキラさせながらコントローラーを握ってゲームへ誘ってくる。そんな姿が可愛らしく見え、持ってきた飲み物等をテーブルに置きコントローラーを受け取り――

「手加減しねえぞ」

「はっ、当然だ。手え抜いたらキレるぞ！」

「んじゃ・・・スタートだ！」

「おう！」

ゲームで対戦してはや数時間、外はオレンジから黒に変わろうとしていた。

「あれ、いつの間にか夜になるぜ？零」

「休憩しながらしてたけど・・・かなりしてたな。対戦に共闘にオンラインに」

零は腕を組みながら来てからやり始めたゲームの数々を思い出す。

「ま、あたしらに勝ってた奴なんて数える程しかいなかったけどな！」

ソファに座りケタケタと笑うニコ。零が前衛、ニコが後衛と役割が決まっており完璧なタイミングでコマンドを入力し勝率を底上げしていた。初見殺しやちよつとしたミス・コマンドミスにより負けた試合もあつた。

「さて、そろそろ夕飯の支度するか」

零が立ち上がりキッチンへ向かおうとした時

「あたしが作ってやんよ、泊めてもらってるしな。彼女の手料理だぜ」
♪

「そうか？じゃあお願いするよ、オレは此処片付けてから下に行くよ」
「おう！」

元気よく返事をする、軽快な足取りで部屋を出てキッチンへ歩いて行った。零はゲームなどを片付けてから1階のキッチンの扉の前に来た時には良い香りが漂ってきた。

「ん・・・良い匂いだな」

扉を開けると白のエプロンを身にまとって慣れた手つきで料理をしているニコの姿があった。

「お、零。まだかかるから適当に時間潰しててくれ」

料理をする手を止めず零に告げる。

「んじゃ、拝見させてもらいましようかねえ」

そう言いながら零もキッチンへ向かい調理するニコの様子を眺めることにした。

「・・・」

「・・・」

「・・・なんか言えよ」

「いや、料理の邪魔かなって」

「近距離で見られてるんだぞ!?なんかハズイだろ!?!／／」

少し頬を赤らめながら零に抗議するニコ。だが料理する手は止めないニコ、流石。

「はは、悪い悪い。大人しく待ってますよ、【赤の王】」

「普通王の名を口にするなら、もう少し緊張感持つと思うんだけどな」
「【紫の王】？」

戻る【紫の王】に料理を続けながら告げる【赤の王】。普通も何も、あの世界の住人なら2人の王がリアルを知っており共に居る事が既に可笑しい話である。

零は大人しくテレビを暫く経つとニコが料理をテーブルに持って

くる姿が見えた。

「零、出来たからテーブルに並べるの手伝ってくれ」

了解、と答えるとキッチンに向かい皿に盛られている料理を運んだ。

「唐揚げに肉じやが・・・が手料理で、漬物やサラダは冷蔵庫のやつか」
「冷静に分析すんなよ!? 折角お前の好物作ってやったのに・・・食わせねえぞ?」

「ごめんなさいありがとうございます」

言われた途端、速攻謝罪する零。

「よろしい・・・んじゃ、食おうぜ?」

「頂きます」

食事が始まるとニコの料理の腕が上がったこと、パドに教えてもらい上達し次はスイーツに挑戦すること、レギオンの今後についてなど話しているうちに料理が無くなった。

「ごちそうさまでした」

「美味かった・・・サンキュ、ニコ」

「お粗末様で。おう、感謝しろよ」

2人は協力して食器を片付け、洗い、一段落着いた。

「ふうく・・・零、風呂沸いてる?」

「ああ、沸いてるぞ。お先どうぞ」

「お!サンキュー♪何なら一緒に入るか?」

ニヤニヤとした顔でニコは零に言う、零は座っていたソファから滑り床に落ち、ニコの視界から消えた。

「入んねーよ!?何言ってるんだよ!」

「おいおい、今更恥ずかしがんなよなあ。前n「さっさと風呂いけ!」わーったよ」

くくく、と笑いながら風呂場へと消えるニコ。それを確認した零はソファに座り直し仮想デスクトップを操作する。

「ったく、あいつは・・・。いつかカウンター決めてやるからな」

暫くして風呂から上がってきたニコと交換して零が風呂に入り、歯磨き等を終わらせてから部屋に戻ると、ニコも仮想デスクトップを

弄っていた。

「パドか？」

「違えよ、9月1日。学校の予定の確認」

「そう言い終わると零のベッドに潜り込み

「寝るくらいはいいだろう？」

と、少し上目遣いで言い。零はこれにだけは弱く―

「・・・仕方ないな」

簡単に折れる。一緒に横になり、電気を消し、2人仲良く夢の世界へ旅立つ。

#2 【秘密】 — S e c r e t —

9 / 1、夏休みが終わり登校が始まる。校門前付近では久しく会う友人同士が世間話に華を咲かせていた。零も例外ではない。

「よお、零。元気にしてたかよ!」

「おはよう、零君」

「おはようさん、零」

「飛羽、真琴、蓮。おはよう」

上から工藤飛羽、紫音真琴、月詠蓮。小学生の時に友人になり、今では良き理解者である。

「なあ、零。後半の1週間の用事って何してたんだ?」

「いや、用事は用事だろ・・・まあ、親関係の事だよ」

「・・・お疲れ様だな、零」

そう言いながら、蓮はオレの肩をぽんと叩く。

「確かに零君の親絡みなら、1週間位何かありそうだよねえ」

これは嘘である。前半の内に宿題を終わらせ、彼等との時間を作り遊び、その1週間はニコの為に調整したのである。

「そういう事だ、遊べなかったのは悪かったよ」

「それじゃ仕方ないか。それと零・・・宿題見せてくれ!!」

バツ、と頭を零に下げる飛羽。それを見た零はまたか、と言った顔をし溜息を零す。

「お前なあ、少しは自分でだなあー」

「言いたいのは分かるがこの通りだ!」

「・・・今度、何か奢れよ」

そう言いながら仮想デスクトップを操作し、コピーを飛羽へ送信する。

「ふう・・・助かるぜ、零!今度飯食いに行く時にでも奢るよ!」

「はいはい、頼んだぜ?ほら、さっさと行こう」

そう言い、4人は中へ入り下駄箱付近に着くと後ろから男女の声が聞こえた。

「おはよう零兄、先輩方」

「おはようございます、零兄、先輩」

腰まで伸びた美しい黒髪に炎の様に煌めく瞳が特徴の少女と黒に深い青が混じっているような髪、少女とは逆で深い海のような蒼い瞳の少年。零の1個下の幼馴染、綾崎久遠と蒼海剣丞だ。

「おはよう、2人とも。今日も元気だね」

真琴はそう言いながら2人の頭を優しく撫でる。2人とも抵抗はせず受け入れている。

「んっ……し、紫音先輩も相変わらずで」

「……私は紫音先輩には勝てない気がしてきたぞ、剣丞」

ほんわかしている真琴には2人とも何故か抵抗出来ず、いつも撫でられている。ちなみに小学生の時からこうである。

「……いつも通りの光景、だな」

靴を履き替えながら蓮はクス、と笑いながらそんな3人を見ていた。

「にしても、本当久遠ちゃんはカッコ可愛いよなあ。女子にも人気だしな」

久遠は成績はそこそこ良く、運動神経抜群でありかなりの人気を出している。本人曰く「負けるのが悔しいだけ」と前に話していた。

「でもなあ、負けず嫌いだけであんな成績になるもんか？」

「私の場合なつてしまったんだ、工藤先輩」

「飛羽が先輩なのは歳のおかげか……」

「蓮!?それは酷くね!？」

何てわいわいしながら廊下を歩いて行き、零達より上の階の久遠・剣丞と分かれ教室へ入って行き始業式まで待機し、式の為体育館へ移動し式が始まった。長い始業式が終わり、教室へ戻り先生から話や提出物の話になり、午前中で下校となった。

「ふう〜終わった終わった!どっか寄って行こうぜ」

「あ、悪い。オレこの後用事あるから先に帰るな」

そう言い残すと零は早歩きで学校を後にした。残された3人、特に飛羽は怪しいと思った。

「なあ、たまにあるよなあ。さつきみたいにさつきと帰る事」

「いや、お前だつて誘つておいて唐突に帰る事あるだろ」

「ああ、あるね」

「ちゃんと理由は話してたろ!?何か気になるんだよなあ・・・後を追おうぜ」

「ええ・・・それどうかなあ」

「零にキレられても知らんぞ?」

「何とかなるって!行くぜ!」

そう飛羽が2人を言いくるめ、3人は零の後を追跡することになった。零に気づかれぬように追跡する事になった3人は零の後を追いつ、練馬区桜台までやって来た。零は迷うことなくある店へ入って行った。

「・・・ケーキ屋?」

「△パティスリー・ラ・プラージュ・・・零と遊ぶ時、たまにあいつ持ってきてたな」

「確かに零君、ケーキとか差し入れすることあつたけど・・・此処のだったんだね」

「ああ!なるほどな!でも、男子中学生が知ってるか?普通・・・つて、あいつの家は普通じゃなかったな」

父親は月影財閥のリーダー、母親は有名な占い師。確かに普通ではない。

「よし、気づかれないように座ろうぜ」

三人は来店し、零の背中の方面に陣取り観察を開始した。もちろん、店の邪魔にならないようにケーキセットを注文し、ケーキを楽しんでいる。

「・・・零のやつ、誰か待ってるっぽいけど」

自分が注文したケーキを食べながら零を観察していると

「よつす、パド。零来てる?」

と、自分達が観察している人物の名前が聞こえ、そちらを見てみると赤い髪が特徴的な小学生がウェイトレスに話かけている所だった。

「HI, あそこのテーブルに」

「お、サンキュ♪」

赤い髪の小学生はウエイトレスに礼を言うと軽い足取りで零のいるテーブルに向かい、肩をぽんとし、零の向かい側の椅子に腰を下ろした。

「零が待ってた相手って・・・あの小学生か!？」

「零に妹がいるって話・・・聞いたことあるか？」

「ううくん・・・ボクは聞いたことないな」

3人が話し合いをしていると、少女は慣れた手つきでケーブルを出し自分のニューロリンカーに挿し反対側を零に手渡す。零はそれを何の抵抗もなく受け取り、自分のニューロリンカーに挿し込む。

「ち、《直結》したぞ・・・？」

「・・・それほど親しい仲なのか。それとも従妹とか・・・なのか」

「・・・ボク、段々気になってきた」

「ここそ話している3人をよそに2人は直結し会話に華を咲かせる。

「———でさあ・・・ん？」

ニコがある事に気付き視線を零から後方へ移す。

「ん、どうした。同級生でも来てたか？」

「ああ・・・どっちかって言うと、零の同級生じゃねえかなあ・・・と」

「・・・何？」

ニコに指摘されて零は眉をピクリと動かす。ニコは自分の視線をスクショし、零へ送る・・・それを見た零はテーブルに頭をつけ項垂れた。

「あつはは、どうするよ。紫の王」

テーブルに肘を付きくく、と笑いながら問いかけてくる赤の王に、額に手を付き考え込む紫の王。

「あいつら・・・まさか尾行してたのか」

「くく、不覚を取ったなあ。さてと、どうする？」

「どうするも何も・・・なあ」

「多分、お前が話してた学校のいつものメンバーなんだろう？ワンチャンぶつちやけるか？」

「・・・それも1つか。よし」

零はそう言うと、ケーブルを抜き速足で3人のテーブルへ向かった。ニコも後に続く。

「・・・よお、お前ら。奇遇だな、こんな離れてる此処で会うなんてな」

「「あっ」」

零に声をかけられた3人はやっちゃったみたいな顔をし、特に飛羽は主犯格である為青ざめた。

「キ、キグウダナ」

「嘘下手か、お前は」

飛羽の頭に軽くチョップを食らわせる零。その後申し訳なさそうに2人が謝罪を始めた。

「すまん、零・・・飛羽の話に乗ってきちゃった」

「ごめんね、零君。後をつける事をして」

「・・・まあ、良いよ。こんな形になったけど紹介するな、この子は――」

「あたしは上月由仁子、小学5年生です。月影さんとは以前ゲームのイベントでお知り合いになって、たまに会って遊んで頂いてもらってるんです。」

「で。まあ・・・その、彼女でもある」

「「・・・」」

そう零が告げた途端、3人は5秒ほど固まって、驚きのあまり大声を出そうとした飛羽を左右にいた2人が口を押える。

「ええ!?!kー」

「黙れ!」

「大きな声はダメだよ!」

「ナイスコンビネーション、2人とも」

「あはは・・・まあ、驚きますよね」

猫かぶりモードで対応していくニコ。飛羽の口を押せながらも2人は零とニコを交互に見る。

「まあ、オレは人の恋路には口を出すつもりはないし・・・それに零

が決めたのなら、大丈夫だろうなって」

「うん、ボクも同じ意見だよ。そうだ、ボクは紫音真琴。零の友達だよ」

「そういえば言っただけだったな。オレは月詠蓮。よろしくな」

「・・・いい加減離してくれよ!」

「あ、ごめん」

「まったくよお・・・そりゃ驚いたけどよ、オレらは零の事情は知ってるし、色恋沙汰にまで口出しはしねえぞ?」

「い、意外にも真つ当な意見だ・・・」

「だ、大丈夫? 驚きすぎて頭おかしくなったかい?」

「いやお前ら、オレの扱い酷くね!」

抑えていた2人の反応に思わず反論する飛羽、そんな3人を見てクスリと笑みを零すニコ。その後、5人でテーブルに着き、ニコは零達の小さな頃の話を聞いたり3人の質問に答えたりして有意義に過ごしていた。楽しい時間程、早く過ぎるもの、外を見ると夕日が差し5人の意識を現実に戻す。

「あ、もうこんな時間になってたんだね」

真琴は店内の時計を見ると、17時を過ぎていた。すると店員の女性(パド)が声を掛ける。

「学生のお客様、そろそろご帰宅のお時間ですのでお荷物を纏めて下さいませ」

「「「はい」」」

5人はすぐに荷物を纏め、店を出ていく。出る際に店員さんが優しく微笑み

「本日はご来店頂き、誠にありがとうございました。またのご来店をお待ちしております」

「(かなり想定外だが・・・まあ、結果オーライか)」

零はそんなことを考えながら4人と一緒に家へ帰っていった。

#3【軍】 — Legion —

「……」

加速世界、オーロラ・オーバル本拠地にてジョーカーはメンバー表を眺めていた。そこには古参メンバーから、ジョーカーがレギオンマスターになってから加わったメンバーが載っていた。

「まさかアイツらがバーストリンカーになれるとはな……しかも覚えが早い上にバトルも上手いと来た……」

そう、ジョーカーが言っているのはジョーカーのリアル【月影

零】の親友3人の事だ。

「まさか久遠の子が蓮の恋人で、蓮がその恋人の子になり、そして蓮から真琴へ、真琴から飛羽へ……って、子を作るリスクの話は受ける筈だよな……まあ、結果としてウチの戦力増強になったから良いけど」

こんなことあるのか？と、当然ながら疑問になるがなってしまうものは仕方ない。結果としてオーロラ・オーバルの人員増加、戦力増強に繋がったのだ。悪い話ではなく、寧ろ良い話だ。これでレベルが上がっていけばリアルでも作戦等話せるから、楽なものである。しかし、順調なのは低レベル帯の間だけの可能性がとても高い。レベル4に上られるか否か……ジョーカーは心配だった。

「確か……【アイス・アサシン】が久遠の子で、蓮の恋人。んで、蓮が【ブラッディ・フェンリル】、真琴が【テイル・インセクト】、飛羽が【スマルト・ソルジャー】……随分個性的なネームだな。それはともかく、王のオレが特定のギルメンだけ見る事は出来ないからな……リアルで直結してバトルしながら教えるとか、家とかで勉強会だな」

スクロールを下げ、バーストリンカーの情報を確認していた。するとそこに1人の女性型アバターが声をかけてきた。

「マスター、またメンバー表を見ておるのか？最近よく見ておるな」

ワインレッド・エンプレス、レベル7のバーストリンカーで2代目紫の王が率いるオーロラ・オーバルの幹部の1人。リアルネーム

は【綾咲久遠】

「エンプレスか、最近始めたばかりのアイツらの成長が速いから驚きもするが心配でもあってな」

「まあ、アサシンは既にレベル4、フエンリル達はレベル3・・・気持ちは我にも分かるが、いざとなったら我等もおる故、問題無かろう」

腕を組みながら壁に寄り掛かりジョーカーへ告げるエンプレス。

「油断大敵だ、エンプレス。1%でも可能性があるなら、警戒すべきだ」

「・・・それもそうだな、心得た」

「うむ・・・それはそうと、エンペラーはどうした？」

マリリン・エンペラー。レベル8のバーストリンカー、エンプレスと同じく幹部の1人。リアルネームは【蒼海剣丞】

「ああ。彼奴ならギルメンと共にエネミー狩りへ行っておる。レベル4成り立てメンバーの為にやる、と」

「優しい皇帝様だな。まあ、それに助けられてるから頭が上がらないよ」

大袈裟に首を左右に振る紫の王。それを見て笑う仕草をする女帝。などと呑気な話をしてしていると、ギルドメンバーが慌てた様子で扉を叩き、返事を返す前に入ってきた。

「ジョ、ジョーカーさん！大変だ！」

「貴様、この部屋に勝手に入室するとはどういうことだ！」

「え、エンプレスさん!? すみません!? で、でも早く伝えないといけないことなんすよ!?!」

「分かったから、一旦落ち着け。そんな興奮状態では聞けるものも聞けん」

「す、すみません・・・すう、はあ・・・よし！報告します！遂に飛行型デュエルアバターが現れました！」

「何!? それは本当か!」

報告に先に食い付いたのはエンプレス。そして、ジョーカーが食い付いたのは次の報告。

「はい！それにそこに【ブラック・ロータス】が現れたんだ！」

その報告に思わず立ち上がり、報告したメンバーを睨んだ。

「誤情報じゃないだろうな？」

「も、もちろんだ！たまたま見てた試合で現れたんだ！」

「デアルカ・・・その対戦のリンカーの名は？」

「【シアン・パイル】って言うレオニーズに属してるレベル4と、【シルバー・クロウ】って言うレベル1だ。クロウが黒の王を抱えて空飛んでたから、多分ネガ・ネビュラス所属じゃねえかな」

レベル1と4・・・？なんでそんなレベル差が・・・。そこはもうでもいい、問題はブラック・ロータスだ。レッド・ライダーを殺つてから姿を隠していたはずだ、何故今表舞台に出て来た？何か決定打が・・・？

「そうか・・・それで、お前は先に落ちて此処へ来た・・・ということか」

「・・・だが、今からどうこう動けはしないし出来ないだろうな。その試合に他のレギオンは居たか？」

「あ、ああ。他のレギオン所属のバーストリンカーも居た」

「なら、明日にも加速世界中に広がるだろうな・・・今は情報収集に徹しろ。こちらから下手に手を出さないように伝えておけ」

「分かった！他の奴らにも伝えてくる」

そう言っただけで彼は部屋を後にし、仲間達の元へ向かい話しをした。残ったジョーカーとエンプレス、ジョーカーは深く椅子に座り直しエンプレスはジョーカーの近くに寄る。

「零兄、加速世界・・・これから誰も予想しない所へ向かいそうだな」

「ああ・・・最高に面白くなりそうだ」

緑色のアイレンズを光らせる。

「厄介事は持ち込まないでくれよ・・・？」

「何を言っている、加速世界なんてパンドラの箱みたいなものだろう？何も起こらない方がおかしい」

「ぐっ・・・確かにそうだから反論出来ん」

「ニコとも話しておいた方が良さそうだな・・・まあ、あつちも情報を手にしてると思うけどな」

仮想デスクトップを操作し、ニコ宛にメールを作成する。

「情報は零兄に任せる、私達は後輩達を育成に力を入れるとするよ。じゃ、またね」

そう言い残してエンプレスはログアウトして現実世界に戻って行った。

「ブラック・ロータス」・・・遂に出てきたか」

ジョーカーはタロットを取り出し軽くシャッフルし引いた、引いたカードは

「ホイールオブフォーチュン運命の輪の正位置、運命的な出来事・・・か。ロータス、会えるのを楽しみにしているよ」